

# 名古屋大学の歴史を語る会

——松坂佐一元学長に聞く——

日時 昭和六二年三月九日(月)

午後二時～四時

場所 名古屋大学学長応接室

出席者 松坂佐一(元名古屋大学学長)

山元昌之(元名古屋大学附属病院事務部長)

岩見史朗(元名古屋大学庶務課長)

江藤恭二(名古屋大学史編集委員長)

稲子恒夫(名古屋大学史編集委員)

山口利男(同)



安川寿之輔(名古屋大学史編集室員)

田中英夫( )

井上知則( )

丹羽 淳(教養部史編集委員)

柏村昌平( )

大井優一( )

大西珠枝(名古屋大学庶務課長)

不破孝一郎(名古屋大学庶務課課長補佐)

亀井朋治(名古屋大学庶務課法規企画掛長)

江藤…きょうは、松坂先生、山元さん、岩見さん、お忙しいところご出席いただきまして、ありがとうございます。お配りしています何枚かの資料がありますが、そのなかの一枚に「名古屋大学の歴史を語る会(第二回)——松坂佐一元学長からのお話を聞く会——」とあります。第一回はすこし以前ですが、医学部附属病院で行いまして、その時は確か山元さんがおみえになっていたと、記憶しております。本日の会の目的は、名古屋大学史の編集が一昨年二月からスタートしまして、部局史それから通史の執筆にそろそろ取りかかる段階になっておりますが、名古屋大学史編集の参考のため、本学に長年在職され、本学の沿革、歴史にお詳しい松坂先生および関係旧職員各位から種々のお話を伺うということです。きょう改めてご紹介の必要もないかと思いますが、正面に松坂先生、私のとなりに岩見(史朗)元庶務課長、あちらに山元(昌之)元病院事務部長のお三方をお迎えして、種々お話を伺います。

わたくしは教育学部の江藤でございます。いま名古屋大学史の編集委員長をやっておりますのですが、

きょうの会の司会、進行係をつとめさせていただきたいと思ひます。

松坂先生は、一九五九年(昭和三四)から一九六三年(昭和三八)まで四年間にわたりまして、名古屋大学総長といった名古屋大学の非常に重要なポストにおつきになつておられます。終戦直後の名古屋大学のいろいろな動きをはじめとしまして、いくつかお聞きしたいことを、お配りした「主な質問項目」に一―五として、ほぼ時代順に整理してございますので、この一―五の質問項目に沿つてお伺ひしたいと思います。何卒よろしくお願ひします。

まず、はじめに一九四七年(昭和二二)、当時の名古屋大学総長は田村春吉先生で、事務局長は須川義弘さんでありましたが、名古屋大学では一〇月に新学部創設委員会が発足し、四八年(昭和二三)四月の委員会に学外から戸沢(鉄彦)愛知大学教授が参加し、同教授の提案で七月から松坂、四方両愛知大学教授が委員会にご参加になつておられます。委員会の議事録と須川義弘回顧録によりますと、創設準備段階での最大の難問は名古屋経済専門学校との関係であつたと言われています。新学部は、とりあえず、四八年(昭和二三)九月文学部・法経学部の二学部として発足し、五〇年(昭和二五)四月に法、経の二学部が分離しています。そこで、文科系学部の創設の準備状況についてお伺ひしたいと存じます。ここでは、特に稲子先生あたりから質問が出るのではないかと思ひますが、よろしくお願ひします。

稲子…いまの点について、もう少し当時の資料についてご説明しますと、名古屋大学が名古屋帝国大学として発足したのは一九三九年(昭和一四)であります。さしあたり、理工・医の二学部で発足しまして、四二年(昭和一七)に理工学部が理学部と工学部に分かれております。戦争が終わりますと、まず四七年(昭和二二)名古屋帝国大学が名古屋大学と名称変更します。同時に、名古屋大学は、三つの問題に直面するわけです。一つは

戦災復興計画、戦争による被害が非常に大きかった大学ですから。第二に旧制から新制への切り換え問題があります。第三にこれからお聞きします文科系学部の創設問題があります。新学部創設委員会が、一九四七年(昭和二二)に発足しまして、当初のメンバーは総長(田村)、各学部長、各学部から教授二名の合計一〇名でありました。そのころ文部省の意向もありまして、戦後の非常に困難な時期でありますので、既存の高等専門学校を吸収することによって、大学を発足させるという話が続いております。四八年(昭和二三)一月から当時の第八高等学校の学校長だった栗田(元次)さん、名古屋経済専門学校から野本(悌之助)校長、酒井(正兵衛)教授が参加するわけです。第八高等学校と名古屋経済専門学校から参加しましたので、新学部発足の際、文科系学部の場合、当然、法学部の発足問題が起きてきました。当時愛知大学におりました戸沢教授が四月から創設委員会に参加しております。幸いにして、この新学部創設委員会の『議事録』が発見されました。それによりますと、戸沢教授の提案で、まず松坂先生を呼んでもらいたい、経済学部に関しては四方教授に参加してもらいたいという要請があります。松坂、四方の両先生は新学部創設委員会の最終段階に参加されております。残念ながら、創設委員会の『議事録』は最後の方になりますと、会議の招集の案内だけが綴じ込まれるようになります。質疑そのものの内容は何も書かれておられない状況です。『議事録』を読んでおきますと、たとえば、最大の問題は、旧第八高等学校、名古屋経済専門学校の教員をそのまま一括して名古屋大学に移すのか、あるいは一部分の教員だけを移すのかという問題です。特に、大学教授の選考は個別審査によるべきだというような意見も随分出されてきました。非常にこのことがもめたように思われる次第です。

もう一つの問題は、戦後一番苦しい時期でありますので、新学部は法文学部一学部で発足させるというの

が最初の構想だったようです。それに対しまして、二学部説が登場してきます。二学部説、つまり文学部と法経学部で発足し、法経学部はいづれは二学部に分離するという構想です。須川事務局長の記録では、この二学部案は事務局としてたいへん困るというのですね。名古屋大学というのは、創設以来非常に少ない事務職員で運営してきており、一学部分の事務職員しか余裕がない時に二学部となるとたいへん困るというのです。最終的には二学部ということで発足することになったのですが。これらのことについては、須川さんの回顧録と非常に不完全な『議事録』しか残されていないので、細かい議論がわからないものですから、この問題について松坂先生と当時課長さんをやってみえたお二人にぜひお聞きしたいと思います。

松坂…それでは、僕が聞いた話をお話します。当時の文部大臣は安倍能成さんだったと思うのですが、田村さんが名古屋大学に法文系の学部をつくりたいというので、京城(帝国大学)の連中をそのまま移したらどうかという話があったというのです。しかし、安倍さんが承知しなかったらしいのです。僕は安倍さんにその理由を質問したことはないのですが、そういうことでそのことがお流れになったので、田村さんは、最初は新制で発足するという意向らしかったのです。ところが、新制だと審査とか非常に面倒なことがあったわけですから、当時岐阜の高等農林専門学校を卒業したか、まだ在学中かの学生で、伊藤貞隆君というのがいて、岐阜高等農林専門学校を名古屋大学に合併してもらいたいということを考えたのですよ。彼が非常に運動をしたのだけれども、新制だと一府県に一大学という考え方が文部省にあったものですから、非常に困難なのです。その運動をしていた伊藤君が、先生それは旧制で発足しなさいと、田村さんに言ったらしいのですよ。それで、田村さんが、それはいいということで、まず、旧制で発足することになったというように聞いています。田村さんは、伊藤のために堂像を建ててやらにゃいかな、なんて言っていました。田村さんという人も、何

というのか、非常に意気に感じる人でしてね。元来、これ深川学校、僕の中学校の先輩なんです。それで、それじゃ旧制で発足しようということになって、いま稲子君が言ったような準備委員会ができたのだと思うのです。わたしと戸沢鉄彦君が法学部関係で参加して、そのほかに戸荻(近太郎)さんが入ってました。そして、経済のほうは渡辺信一君、四方博君、酒井正兵衛君で、文学部は辰野隆さん、淡野安太郎さん、原随圓さん。当時聞いたところでは、第八高等学校は栗田元次さんを出すわけにいかないから、原随圓というの歴史の先生ですが第八高等学校の出身なんです。それで、原さんが第八高等学校のほうの意見を代表するというようなことらしかったですね。それから、辰野隆さんというのは田村さんと中学が同窓なのです、性格がよく似ていますよね。それで、入ったのだと思うのですよ。淡野さんは、当時第一高等学校の教授だったと思うのですが、どういう関係で入ったのか、僕は知りません。そのへんのことには、岩見さんあたりがよくご存じではないでしょうか。

岩見…僕は、深いことは知りません。

松坂…そうですね。田村さんというのは、自分で思ったことはどんどんやる人ですからね、局長が何を言おうが、やろうと思っただらやってしまう人なんですよ。

稲子…新学部創設委員会の記録を読んでいますと、その時の愛知大学との関係がわりにうまくいかなかったという事柄なのですが……。

松坂…一九四八年(昭和二三)だったかな、京城帝国大学と東亜同文書院の人が主となって、愛知大学ができたのです。東亜同文書院の院長をしていた本間さんという人がいましてね、この人は、一橋にいるころ、杉村君と喧嘩しましてね、杉村君の学位を出さなかったと言うような事件があった時に、やめて東亜同文書院へいっ

たのですがね。それに小岩井讓、彼らが東亜同文書院から帰ってきて、ほかの植民地の学校の学生は、台北帝国大学にしろ、京城帝国大学にしろ、ほかの大学で受け入れてくれるのですが、東亜同文書院の学生はあまり受け入れてくれない。そこで、その後始末のために学校をつくらなければいけないとなったのです。ちょうど田中耕太郎さんが当時の文部大臣か何かで、田中さんと本間さんとが……が一緒なものですから、戦後のあんな時にあのようなことで大学がよくなったと思うころにできたのですよ。愛知大学は新制でしたから、教授の員数とかいろんな基準があるでしょう。あれは、一度審査を通過しても、翌年あたりにもう一度審査がありますから、僕らが抜けるとそれが通過できないから、もう少し待ってほしいということで、昭和二四年になったわけです。

稲子…先生は一九四八年（昭和二三）の秋から、法経学部で授業はやってみえますが、身分は愛知大学に残っておりまして、翌年の四月九日によりやく名古屋大学教授の発令になっていますね。

松坂…そうです。だから、法学系で最初の任官をしたのは、山下康雄君です。かれは北海道にいたんですが、出身が常滑ですから、こちらのほうへ来たいと言うので、かれも無理やりに来たわけですよ。

稲子…新学部創設委員会の記録では、特に名古屋経済専門学校をどのように取り扱うかが問題となっております。名古屋経済専門学校の当時の野本校長が創設委員会に入っております、一括方式というのを主張されました。それに対し委員会としては個別審査ということを主張して、非常にもめたということですが。

松坂…おそらく名古屋経済専門学校はたいへんだったでしょうね。それから、僕は直接聞いてはいないけれども、第八高等学校だっていたいへんだったろうと思いますよ。当時名古屋帝国大学というのは、なんといっても、理学部が牛耳っていましたよ。柴田雄次さんが、若いい連中を集めたでしょ。だから、なかなか鼻息も強

かったんですよ。それで、いわゆる研究業績のない先生方を大学の教授にはできないと言って、非常にやましかったですね。その点は、いい点もあり、惜しいと思うこともあります。惜しかったなと思うことは、第八高等学校あたりで、非常に教え方のうまい先生や学生をぐんぐんたたき込んでいたいい先生が残れなかったことです。語学とかの先生は、いい研究があるからというだけじゃね。まあ、教養部のことについてはあとにしておきましょう。

山元…ちよっと、よろしいですか。昭和二二年の一〇月新学部創設委員会については、何か記録がございますか。稲子…はい、記録がありまして、出てきました。

山元…これは、おそらく、昭和二四年から発足する新制大学の発足のための委員会ではなかったかと思うのですが。そうじゃないのでしょうか。須川さんのお話によると、大学のイニシアティブで旧制大学として整備したとおっしゃっていますから、新制学部としてのいろいろな検討をやっている時に旧制学部としての整備案が出てきたのではないのでしょうか。

松坂…おそらく、僕がさっき言った伊藤君のことだと思うんだ。最初新制大学でやっている時に、伊藤君が田村総長に会って、旧制ならいつでもできる、そうしたほうが早いのだということを知って、旧制大学でやったんじゃないかな。

山元…須川さんのお話では、大学がイニシアティブをとって要求したことになるんですが。岩見さん何か記憶ございませんか。当時の記憶では、総長会議とって非常に権威ある、文部次官がもみ手で来るような権威のある会議がありました。そこで、話が出たのではないかと思うのですがね。文部省の方で、旧制大学のうちに学部を整備しておけという話が出たように、私は聞いております。そうでなければ、このように



簡単に、法経学部とか文学部ができるわけがないのですよ。それに、旧制ですから、新制のように大学設置認可申請書が必要ではないので、とんとんとできちゃったんです。その旧制をつくる時に、第八高等学校、名古屋経済専門学校、岡崎高等師範学校、これを合併しようとしたんです。文部省がこれをのんでいたかどうかは知りませんが。それで、昭和二三年に文学部と法経学部が旧制学部としてできたんですよ。

松坂…いま、当時の総長会議の話ができましたけれども、近頃はどうか知らないけれど、わたくしが総長をしていた時分の総長会議というのは、これは非常に権威のあるものでね、文部省も一目置かざるを得なかったですよ。年一回必ず文部次官も出てきましたね、文部省のいろいろな顧問になっていてね。ところが、最近聞いてみると、学長会議というのは、あまりそういうことがないらしいですね。もとの帝国大学の総長と新制大学の学長とはまるでちがうのですよ。

江藤…その七帝大の会議というのは、先生がご在職の頃もずっと続いていたんですか。

松坂…ええ、今でもやるのはやっているんじゃないのですか。ただ、文部省に対してそれだけの権威を持たないのじゃないかと思うのです。

岩見…確かに総長というのは偉かったですよね。

松坂…新制大学になってね、旧帝国大学の学長の権威は引きおろされたですよ。みんな同じになっちゃってね。稲子…いま、山元さんが、新学部創設委員会を新制学部としてという意味じゃないかと言われたのですが、議事録が出てきまして、岩見さんのはんこを押してあるのが出てきまして。

岩見…そうですか。

山元…すでに文学部と法経学部が旧制学部として、昭和二三年にできておりますね。

稲子…ええ、非常に早くできています。非常に早くと言いますのは、昭和二三年九月に設置が決まりまして、急拠入学試験をしまして、一〇月から授業を開始するようになってるんです。普通だったら、半年待ってもいいのですが。おそらく、さきほど松坂先生が言われたように、旧制時代に発足させておいたほうがいいというので、急拠発足させたものと考えられます。

山元…旧制ですと講座制になりますので、岐阜の農林専門学校が名古屋大学の農学部になりたいというのは、旧制でなれるからです。新制ですと学科目制になりますので、だから、ものすごい運動がありましたね。農林専門学校の校長とか、伊藤君とか、他の教授などが、毎日のようにやってきてね。旧制というのは、講座制でというところに目があったのですね。

新学部創設のことについては、時間的にも、昭和二三年には文学部や法経学部ができていますから、この学部創設委員会は新学部創設委員会のような気がしたんですがね。岩見さんそのへんどうなんですか。

岩見…昭和二三年九月には、もう旧制でできていますから。

山元…そのように旧制でできておりながら、なお新制大学の時の大学設置認可申請書を作らされたのです。毎日毎日そればかりやって、忙しかったですよ。どうして官立大学がこんなことをやるんだということがあったんです。私学と区別がないようなことを。

岩見…学部をつくる時は、何万冊かの本があるというのが大体あるのですよね。農学部をつくる時に農学関係の本が……。それで、東京大学の農学部長さんあたりに何かご存じじゃないかと話をしたら、じゃあ、うちに一万冊くらいあるから、それを持って行きなさいということになって、急拠東京大学のほうから運んだのですよ。中には何があるのかも全然検討せず、全部持って来たんです。それを並べて農学部の申請をやったん

です。ばかみたいなことですがね。そうしないと、私立の大学が国立はなんだ、本一冊もないじゃないかと  
言って、ねじ込まれたんですから。私立の場合は先生方の本だったんですね。

江藤…その一万冊というのは個人のものですか。

岩見…いえ東京大学のものです。東京大学のほうでは必要ではないというような、廃棄するようなものだったの  
です。

江藤…東京大学では必要でないという本ですか。

岩見…まあ、多少は必要なものがあつたかもしれませんがね。

松坂…とにかく最初の頃は帝国大学といったって、特別扱いだったですね。

江藤…では、時間の関係もありますので、二の問題あたりも含めて、お願いします。

稲子…それじゃ、二番目の問題に移らせてもらいます。松坂先生は、昭和二四年四月に制度上も名古屋大学教授  
になられました、先生は評議員として大学の全体の管理運営をなされ、それから図書館長、法学部長をされ  
ています。

松坂…図書館長、これは田村先生の独断みたいなものですよ。前に杉田直樹という精神病学の有名な教授が図書  
館長をしておられて、その方がやめられて、わたくしが図書館長になったのです。図書館長といたって、  
別に大学の図書館があるわけじゃないのです。医学部の図書館でして、またほとんどの図書は各学部に属し  
てまして、大学全体の図書なんていうのはないと言ってもよいのですよ。医学部の図書館はともかくレンガ  
づくりでしょ。こちら(六聯隊)は兵隊屋敷でしょ。それを須川君が出張中に一日で引越しちゃったんです。  
田村さんというのは、そういうことのできる総長だったのですよ。

岩見…山元さんが、田村先生にいつぱつやられたんですよ。明日、引越せってね。それでえらいことだといふので、慌てて、全部引越したですね。まあ、山元さんはおうじょうしたですね。

山元…そのへんも何か記録があるかもしれませんが、六聯隊の建物が取られかかっていたんですね。たとえば、財務局が入るし、ほかにも入ってきましたね。名大は厚生省から書類をもらっていたんですが、皆入っちゃうものですから、まごまごしていたら全部取られてしまうということで、田村先生は、本が一番らくだから、本だけさきに行け、すぐ行けと言うのです。それで、二時間くらいでパパーとやっちゃったのです。

稲子…今のことですが、須川さんの話によると、ほうっておくと、六聯隊の建物をよそがどんどん取っていく気配があるということ、それから学生援護会の寮になるというので、そこで急拠、名古屋大学としては約束があるというので、どんどん抑えたという話があるのです。

松坂…ところで、僕が図書館長になったのは、まだ名古屋大学に来てまもない頃で何もわからなかったのですが、本が好きだったものですから、お引受けしたんです。

山元…これが六聯隊に移ってからの図書館ですね。それまでは医学部の図書館しかなかったのです。

松坂…医学部の図書館に、一般的な図書というのがどの程度あったのかなあと思うのですがね。

山元…あれはね、昔の予科当時のものが相当あったのですよ。

松坂…予科？ ああ、そうか、愛知医科大学の時の予科ね。

山元…ええ、愛知医科大学の予科のものが相当あったですよ。

江藤…あの頃、神宮皇学館の図書が移籍されてきていますね。

松坂…それは、六聯隊に移ってからです。これは田村さんの創意かどうかは知りませんが、ここの図書館として

は、この近県の医学部の図書のカatalogを作って持っていたんです。そして照会があれば、どこどこにあるとか、それから当時ドイツの写真機かなにかで複写をするとか。そういう点で、医学部の図書館はこの地方の図書館の中樞をなしていたわけなんです。

稲子…先生の前の図書館長は、医学部の先生だったんです。

松坂…ええ、医学部の杉田さんが名古屋大学の図書館長でした。

山元…それで、図書館の書庫が心配なものですから、営倉を書庫にしたのです。その隣の棟を図書館の閲覧室や事務室にしたのです。ちょうど、門を入れて右横のところでした。

松坂…いま、皇学館大学の図書のことが出てきましたが、法学関係のものを貰って非常に助かったわけです。それと、名古屋経済専門学校に平田君という教授がいましたね、今の平田(春二)さんのお父さんですが、この人がわりあい本を集めてみえて、それでだいぶ助かりましたね。しかし、ほんとうに法学部としては本が一冊もないので、山元さんが会計課長だったものですから、京都丸太町あたりの古本屋を一緒にあさったんです。

山元…そうですね、ざあっと歩いたのです。戸沢先生と三人でね。それから、京都大学の法学部によって、法学部長の斎藤君に重複図書を譲ってくれと言ってね。ほんとうに図書がない時でしたから。

松坂…法学部、当時はまだ法経学部でしたが、戸棚に一杯もなかったですね。そんなひどい状況でした。

田中…ちょっと、その図書館のことでよろしいですか。わたくし図書館の田中と申します。ちょうど松坂先生がご在任になられた昭和二四年から二七年くらいのこと、ちょっと小さな問題ですけどお伺いしたいのです。一つは商議員会のことですが、商議員会というのは新制大学になって制度上はすぐ発足するのですけれども、記録は昭和二五年からしか存在しないのです。その間商議員会というのはどのようなようになっていた

しょうか。

松坂…そんなものは開かなかつたなあ。

(笑い)

松坂…そんなものはなくて、館長自身ですきなように使っていましたよ。だから、たとえば文学部関係のものなんかでも、本がないのにね、叢書のようなわりあい高いものを買ったりね、そういう自由ができたですね。

田中…それからもう一つ、これは事務組織の問題なのですけれど、戦前の帝国大学の頃には、図書系の職員はというのはいわゆる分室制度というのがありまして、医学部の二階に本館があって、医学部分室、理學部分室、工學部分室のそれぞれへの附属図書館の身分のまま出向して仕事をしていたんです。しかし、それが昭和二五年以降の記録を見ますと、いろんな議論がなされているのですが、結局あいまいなまま分室という存在が原理的には消えてしまうのですね。図書室は、それぞれの部局の所属になって、附属図書館の出向という形ではなくなってくるのです。それで身分がですね、昭和二五年の商議委員会の記録を見ますと、「各分室勤務の職務身分は附属図書館から、各出向学部に移される」という記録があるのですけれども、そのへんについて何かご存じではないでしょうか。

松坂…僕の場合は、まだ分室として運営してましたね。だから、わたしの頃はまだ移されていませんでしたね。

田中…あっ、そうですか。

松坂…これはね、僕は非常にがんばってやったのですが、結局大学というのは、各学部が独立していて、独立王国みたいなものを持っていてね、図書のことでも全然他とは独立していたね。たとえば、経済学部で『大日本史料』なんて買うでしょう。文学部でも買うのですよ。それから『Chemical Abstracts』みたいなものが

ありますよ、あれをね工学部でも買い、理学部でも買っているんですね。わずかな予算でもったいたないというのですよ。図書館で一括して購入すればいいんですね。結局そうすると、利用できないということ、しようがないな思ったのですけれどね。文学部では、本が研究室別に別れちゃっているでしょ、これは非常に不便なんですよ。その研究室の助手でもいなければ使えないでしょ。これをなんとかして一つのものに、少なくとも学部全体としてはまとめてはと思ったのです。結局できませんでしたね。それで、僕は、法文系の図書だけでも一括できるように、法学部と教育学部の間にあき地をつくって、ここに将来そういう文科系の図書を見る所をつくったらいだろうと思ったのです。それは、僕が京城帝国大学にいた時、法文系の学部の図書館というのは一つだったでしょ、すると、非常に便利なのです。われわれが哲学の図書を見ようと思っただって、そこへ行けば見れるでしょ。これはなんとかならないかと思っただけでも、やっぱり今の大学の学部の独立制ではだめなのです。それで、僕は、しようがないから、字引なんかをひとつ集めてやろうと思っただね、字引を集めたですよ。そういう点では、図書館長というのは非常に楽しかったですよ。

江藤…先生の頃の図書館長は学長の任命ですか、選挙だったのですか。

松坂…いや選挙じゃないですよ。それは、もう田村さんの任命ですよ。

江藤…ああ、そうですか。

稲子…あの、ちょっと話題を換えさせていたのですが。名古屋大学の学内規則というのは、戦争中のももあったと思いますが、ほとんどが戦後につくられておりました、一つのいわゆる民主化時代のモデルだろうと思うのです。たとえば、古い考えですと学生を補導するとかですが、名古屋大学の場合は、学生部、学生課が整備されてくる時に、教官側の組織を学生生活委員会という名称にして、学生の思想や行動を補導

するということはないということで、学内規則がほとんどつくられておらないのです。ちょうどその頃、先生は昭和二四年に名古屋大学に來られました。いわゆる、戦後の学生運動というのは、昭和二四年から始まるのですが、このきっかけは授業料値上げ問題と例のイールズ問題です。当時の評議会の記録によりますと、昭和二五年ですけれども、名古屋大学にイールズともう一人が來るといふ意向が伝えられて、評議会はくり返し、どうしようかという議論をしているのです。結局、來なかつたのですが、その当時の名古屋大学は、文科系学部がつくられて、ようやく総合大学としての体裁が整つた時期です。戦後の新しい大学づくりというものが始まつた状況でして、それと学生運動の最初の火がついたという状況の中で、具体的には、どういふような状況だつたかということをお聞きしたいのですが。

松坂…僕が教養部について、はじめてのいわゆる学生運動というのは、なんか「ケイシヨクホウ」とか言つて、どつういふ法律だつたのか、どつういふ字を書くのか、今ではわからないのですが、

稲子…警察官等職務執行法。

松坂…あの時に学生が騒いだことがありましたね。それが、おそらく名古屋大学としてははじめてじゃないかな。その時に僕が憤慨したのは、教養部の先生はもう非常に一生懸命でやつていふのですが、学部の先生というのはそつぽ向いていふのです。まず、対岸の火ですね。それでね、この教養部の先生方の苦労というのを伝えることに、ほんとうに苦心したですよ。それとやつぱり当時わたしの苦労したことは、教養部というのは講座がないでしょう。学部の先生には、講座のない教養部の教授だといふような考え方がやつぱりどこかにあるのです。なんとかそれをなくそうといふことに、僕は一番苦労したね。

稲子…江藤さんは、いつから名古屋大学に來られたのですか。



江藤…わたしは、昭和三五年からです。

稲子…わたしはもうこの名古屋大学に来ていましたけれども、当時、文科系は六聯隊、お城の中にありまして、理科系は東山、工学部が一部高蔵にありまして、教養部は離れていて……。

山口…教養部は滝子と豊川。

稲子…いわゆる典型的な「タコ足大学」だったです。それで、教養部の問題というのは六聯隊ではまったく実感が湧かないのですね。

松坂…僕は、その点でほんとうに憤慨したですよ。今でこそ、学生運動が何だものだから、学部の先生方も対岸の火事みたいな気持ちではおられないけれども、そりゃ、山口君などはきっと身にしみて感じているだろう。

ところで、教養部長の一番始まりは戸荻(近太郎)さんだと、僕は思うのだが、戸荻さんの名前が(資料には)出ていないが、部長でなくて行ったのかな。

稲子…当時は教養部、教養部長というのは通称でありまして、官制上は分校、分校主事として、最初は戸荻さんでした。

松坂…僕なんかも分校主事じゃなかったかな。

山口…ええ、先生も分校主事です。官制化は昭和三八年からですから。

松坂…学生運動にはならなかったけれども、僕の記憶では、名古屋大学として大変だったのはラニアの事件です。あれはもうわかっているでしょ。

山元…須川さんには書いてありますかね。

松坂…あれで、名古屋大学としては工藤(好美)さんとか、服部英次郎さんとかを結局何してね、惜しいことだし

た。あの時も、僕は勝沼先生から相談を受けたのですよ。勝沼先生はああいう人ですからね、学部で反対があると、決断が、やっぱりどうしたものだろうかとなるのですよ。しかし、学長として対外的にも報告しているのだし、国際的な問題もありますし、それは今さら撤回してはいけませんよと、僕は言ったのです。あとは、内部の問題ですからね。

江藤…話が教養部にも移ってまいりましたけれども、きょうは、山口先生はじめ教養部の先生が何人かおみえになっております。それでは話を質問の第三、第四のほうへも移していきたいと思いますが、山口先生どうでしょう。

山口…それでは、お尋ねする前に、いま委員長からもご紹介があったのですが、教養部からの出席者の五人を紹介させていただきます。先生のお手元にも、わたくしどもの教養部史の執筆の時の時期区分のようなものが、わたっております。第一期は一九四九―六二年までで、一応「分校時代」のような形で捉えておまして、先生の分校主事の在任中はここに入ります。その執筆予定の安川先生と丹羽先生です。それから大井先生、大井先生は松坂先生が教養部長の時もいらした方です。柏村先生は第二期（一九六三―六九年）を担当されますとともに、全体を見ていただくということで、きょうぜひお話を伺いたいということで見えております。

それでは、わたくしのほうから代表のかたちで、お尋ねさせていただきます。

教養部の足どりを簡単におさらいをしてみますと、いま出ていました教養部という正式な制度上の位置づけになったのは官制化と呼んでおきまして、それをわれわれは第二期の頭に置いております。松坂先生が教養部長でいらっしやったのは、第一期のところに入っております。わたしどもが活字の上から見ますと、教

養部というのは第八高等学校、岡崎高等師範学校というのが、昭和元号で申しますが、昭和二四年に瑞穂と豊川の分校になった。それで、教養部という名前が事実上使用されてくるのが、昭和二七年。ですから教養部、教養部長という言葉が出来まして、この時の部長さんが三雲(次郎)先生で、記録によると戸苅先生のお名前は事務取扱という形になっております。さだかではないのですが、そういうようになっております。三雲先生が昭和二九年から三一年までやられまして、そのあとを松坂先生が教養部長としてご在職なされまして、一期二年ですから三一年から三三年、そして第二期の途中で総長になられて、教養部長をつぎの篠原(卯吉)先生にお譲りになった。こういう時期だったと思います。ですから先生がいらっしやったのは分校時代で、わたくしどもが第一期と申しあげる時期でございますが、第二期の独立と言いますか、官制化される前の地固めを先生の時代になさっていらっしやったのではないか。いろんな大きな問題の方向づけを、松坂先生が教養部長としていろいろお出しになっておられたのではなからうかと、こんなふうに考えております。大きな問題がたぶん三つぐらい考えられます。一つは全学における教養部の地位、二つめは教養部の人事および管理運営、三番目に教養部の施設です。今のように官制化される前の教養部でございましたので、全学における教養部の地位というか、位置づけというのがたいへん不安定ではなかったかと思えます。だから、改革か、将来のあり方などもしばしば問題になっていたのではないかと思われまます。たとえば縦割りとか、横割りという言葉をお伺いしましたけれども、そういう全学の中での教養部の位置づけというものがどういうふうに考えられていたかということが、一つ出てまいりました。

もう一つは、まだ官制化されていない教養部、分校というものは、これを管理運営する時にもまだ一人前ではなかったのではないか。たとえば、協会の人事も独立に行われていなくて、先生のご在任中にはじめて

教養部教授会というのが正式に発足したということになっております。

松坂…はあ、そうでしたか。

山口…はい、それは、お手元にある先生へのご質問の中のこの紙にちょっと書いてございますが、先生が昭和三年三月に教養部長になられた、その年の一〇月九日に第一回教授会が発足したとなっております。教養部長以外の教授の選考は、そこで……

松坂…教授の選考については、やはり学部の方の意見がなにかあったらいいですね。僕の時には、それはもう排除しました。それは、教養部の教授会ができていますから、(学部の意見などには)従わなかったですよ。ただし、関係科目の教授の方がどのような人がいいだろうというようなことは相談なさったかもしれませんが、正式に学部のほうからの意見というものは出してこなかったですよ。そういう点は、教養部ができる時に理学部あたりが随分介入したんだと思うのですよ。それがまだ残っていたのではないかと思うのですが。

僕は、教養部の教授というのは、若い学者で、学者だから研究業績があるからということだけで選んでは困るとね。むしろ、寺田寅彦さんみたいな、あのようなできあがった人で、総括的に学問というものを考えることのできる人でなければ、という考え方を持っていたものですから。ことに、アメリカあたりの大学を見ても、新制大学というのは教養部というものが一番大切なのです。いまの学部というのは大学院に匹敵するのです。こういうふうな制度のほうが見たいという考えを、僕はいまでも持っていますからね。ところが、アメリカでもそういう教養課程の先生を得るというのは非常にむづかしいと、嘆いていましたね。だから、僕の理想からいうと、いまの教養部の進み方というのには疑問を持つのですよ。縦割りとか、そういうこと

はもちろん僕は考えておりませんでしたしね。

山口…いまもお話に出ましたが、教養部についてたいへん高いところからご指導いただいたと思います。I.D.F. というものがございましたね。あれは総長のほうで地区の責任者になるということでしたか。

松坂…僕はならなかったです。

山口…そうですね。

松坂…僕の時は、勝沼先生が総長をやめられてからも、勝沼先生にお願いしてました。だけど、大学関係については、わたくしも非常に興味を持っていますから、叢書に三冊ばかりドイツの大学のこと、新制大学のあり方のことについて書いておりますがね。

山口…先生、これはまったく余談ですが、さっき教養部は学生紛争でたいへん苦勞したとのことでした。確か、わたくしも先生のお手伝いをして、時々出掛けましたけれども、のちに先生がわたくしにドイツに行かないかとすすめてくださり、その資金はI.D.F.からのファンドで出してくださいましたね。ですから、わたくしは、先生がI.D.F.に関してもいろいろ尽力なさっていたのではないかと思っていたのですが。

松坂…あの頃は、新制大学に対しては非常に皆熱心でした。ことに、僕の友だちに玉虫文一とか、佐々木繁雄などがいてね、一生懸命新制大学のことをやっていましたしね。

山口…松坂先生の時に管理運営では一つの方向づけが出たわけですが、それから、第三の施設の問題に関係するものとして、東山移転の問題が出てきます。この頃すでに、そういうお話は出ていたのでしょうか。

松坂…僕の時ですよ、あれは。

山口…実際には工事は昭和三七年からでしたが。

松坂…あれは、僕が学長の時に県にですか、話をしたのです。さいわいに、桑原というのは、わたしの第一高等学校の同級生なんです。

山口…元愛知県知事の桑原幹根さんですか。

松坂…ええ、そんなことだから、わりあいざっくばらんに話ができてね。その前にも、なにか副知事がいて、第八高等学校の出身でね。あれをなんとか県で買い上げるといいのだけれども、どうもやはりいい名目がないので、というようなことを言っていたのですけどね。教養部は愛知県ではなくて、名古屋市でしょう。教養部のほうは、名古屋市が経済学部をつくることで、交換したのです。愛知県との交換は体育館ですから、教育学部、文学部で、本部が一応入ってましたが、県は本部のことを考えない、本部のことも考えてくれなきゃいけないとね。わずかな金でとても満足できる本部はできなくて、非常に小さなものになったのですが。まあ、それでも本部と、それから何かの余った金があって、先生方が会食する所を。名古屋大学って、ほんとうにバラバラなのですよ。会議をすると学部の代表みたいな議論ばかりで、ふだんは話していない。だから、やはりふだんから話をするような、食事を一緒にでもするような所をとるのでね。

それから、図書館については、あれは亀坂(文衛)君がよくやってくれたと思うのです。僕が、学長を引き受けた時に、勝沼先生が図書館だけはなんとかしてつくってくれ、ということだったのです。しかし、当時経済界は事情がわるうございましてね、日銀の支店長の松本君だとか、中部電力の井上(五郎)君なんかは、いまはとてもだめだよと言ってね。それで、困っていたところを、一二年たった頃に、古川(為三郎)さんが結婚して何周年かになるので、一億円ばかりで何か記念になるものをということが、名古屋市のほうに話があったのです。市に話があったところを、松見君という当時の水道局長がいて、彼は千種の区長をしてい

るころに古川さんと仲よくなったのですがね。話があったことを松見君から亀坂君が聞いたのですかね。二人は第四高等学校の同窓生かなにかでしょう。それはいいということ、市のほうでも、教育長あたりは自分のほうの何かをやってほしいと思っていたでしょうが、うまく話をしてくれてね。その頃、明治村の工事が始まっていますね、谷口(吉郎)さんという建築家の有名な人がいたものですから、名鉄の土川(元夫)君、かれも第四高等学校の出で一緒なんですがね、かれが頼んでくれたのです。それで非常にいい建物ができて、僕は非常に安心したのですよ。そのかわり、やはり図書館としては使いにくかったのじゃないかとは思いますが、すけどね。

大井…先生の教養部長の頃から、名古屋大学の学生の数が、とくに工学部関係で増えてきましたね。新制大学が発足した時には、第八高等学校、岡崎高等師範学校、そして名古屋経済専門学校でむしろ先生が余っちゃって、解雇もあつたというのはおかしいですけども……。

松坂…だから、やめられた方がうんとありますよ。

大井…そうですね。それで増える時は、たとえば文部省の省令や定員とか、そういうことは全然お考えにならないで、それとは関係なしに適当に増やされたというわけですか。

松坂…僕は、工学部の定員の増える時は知りませんね。あれは僕がいなくなっただらろう、四〇人も八〇人も増やしたのは。

稲子…高度経済成長長期に理科系が、まず、どんどん増設されていきました、ベビーブームの時に文科系が増えまして、わたくしの記憶では、たとえば、学部で学生増の場合に、学部は講座増ということになりました。当然教養部の人員増というのが付いてきていただろと思うのです。確かそうでしょう、江藤さん。

江藤…そのように思いますね。

今までずっと、この質問項目、大体時間を追いまして、一、二、三、四期と進めてきまして、第四期目のところが非常に重要な時期ですが、今、この時期に入ってきているのですが。一九五九年、昭和三四年から三八年まで松坂先生の総長ご在職時代は、東山キャンパスへの統合のまさにその時期でありまして、経、法をさきがけにして文、教育があとを追いかけて、移転して来るとか。また、いま、お話のあった古川図書館ができるとか、あるいは豊田講堂が昭和三五年にできるとか、プラズマ研究所が翌年に設立されるとか、総合大学としての実を揃えてきたというか、そういう充実の時期にあたると思うのですが、その全体状況をふり返りになって、特にこういうことは印象深かったとか、そういうことがございましたら、お教えください。稲子…ちょっと、その前に復習的なことなんです、名古屋大学の東山の整備計画を調べてみますと、戦後、名古屋大学の戦災復興計画というものがつくられておりました、また名古屋市は名古屋市東山地区復興計画いわゆる田淵計画と言う都市計画がありました。当時は、名古屋大学の事務局長の須川さんと、名古屋市の田淵(寿郎)復興局長が接触しております、都市計画と名古屋大学の整備費に募金を出さしているという記録があるので。だから、なぜ大学の真ん中を自動車走るとかということは、実はこれは名古屋市の初期の都市計画と名古屋大学の計画とが結合した結果だろうと思うのです。それから、真ん中の広いグリーンベルトは、住宅計画との関係でつくられたというように理解してよろしいでしょうか。グリーンベルトは、本来なら、若宮大通の延長線にあたるのですね。

松坂…ええ、そうそう、若宮大通が大学の西まで来るはずだったので、そこまで来るので、あっち(西)を正門かなにかができるように考えていたものと思います。そして、若宮大通の計画はすでにできていたので、大



学のほうがあとだから、そんなに文句はいえないのですがね。僕と杉戸市長との間では、この下に地下鉄を通すその時には道路を地下道にするということを話合ったことがありますね。しかし、幹線道路になっ  
てしまったから、今さらどうにもならないですがね。

稲子…さて、年譜を見ておりますと、まず先生の総長就任前に、経済学部、法学部の移転関係がございます。それから、第二には講堂の問題ですね。勝沼先生の時代にトヨタ自動車工業株式会社と交渉して、豊田講堂を  
寄付してもらったのが決まっておりました。先生の時代になって、大きな問題は、先ず、教養部の移転問題、  
それから、かつての六聯隊にあった文学部、教育学部、本部、図書館の移転問題です。そして、プラズマ研  
究所の設置という問題がありました。たいへん苦勞されたということが、評議会の記録や整備委員会の記録  
から分かるわけなのですけれども、そのへんについてお聞きしたいと思います。

松坂…豊田講堂は、もう、これは勝沼先生の時に決まっています、それで豊田講堂の開館式の時も、勝沼先生は総  
長をやめておられたのですけれども、一度トヨタから勝沼先生に目録を渡してもらって、そして勝沼先生か  
ら僕が受け取るというやり方を採ったのです。

それから、経済学部の移転の問題が実現したのはわたくしの時ですが、すでに話はできていました。あれ  
もなかなか経済学部のほうが自分のところの土地を売ったのだからというので、規定よりも広いものを要求  
してですね、実際それが実現したのです。ご承知のように、キタン会という強い後援団体がありましたね。

それから、僕の時には桜鳴寮の問題がありましたね。桜鳴寮というのは寄宿舎なのですが、新しいものを  
つくったのですが、学生が入らないというのですよ。寮費を安くしろとか、いろんな条件を付けてましてね  
ちやうど重松(鷹泰)君が学生部長をしていたのです。僕は、学生に入らないなら、入らないでかまわないか

らと言ったのです。(古い寮の跡は)看護婦の宿舎として、どうしてもいるのですから。だから、強行しろと言ったのです。そしたら、学生も入ったですけどね。

稲子…いまの寮を医学部附属病院の看護婦寮として使うということですか。

松坂…いや、そうじゃないの。名古屋市のです。

稲子…名古屋市の看護婦寮。ああ、そうですね。

松坂…名古屋市との交換条件ですからね、大学として、学生が文句言ってますからといって、延ばすわけにはいきませんからね。

それから、一番厄介だったのは、文学部と教育学部の移転の時ですね。とにかく、文学部のほうはなかなか承知しないのですよ。

稲子…わたくし、ある程度知っておりますので申しあげます。問題は、六聯隊からどう移転するかということとして、(跡地を)愛知県が欲しいと言ってまして、県としてはそこに体育館をつくる予定で、それで、大学と県との間で話が進んでおりました。財政的にどう処理したということはあとでご説明したいのですけれども、最後の段階で文学部は、当時法学部がすでに(東山)移転したあとでしたので、文学部はかなり六聯隊の跡地を余裕をもって使っていたのです。それに新しい建物では狭くなってしまいうから、サークル活動ができない。当時は法学部のあとを使っていた関係で、一学科でものごくたくさん部屋を持って、のびのびと暮らしていたというところから、問題が起きてきたのです。それで、学部長の新村さんがたいへん苦労されたのです。そうなんです、先生。確か、面積の問題だったと思うのですが。それから、六聯隊は都心にあってたいへん便利だから、なにも移らなくなっただけいいということもありましたね。

江藤…文学部は法学部のあとに使っていたのですね、なるほど。

稲子…教育学部も使っていたのですよ。

江藤…ええ、もちろん。

(笑い)

松坂…教育学部は、なにか早く移転を促進してくれと言ってたね。誰が学部長でしたっけ。

江藤…古木(弘造)さんくらいですね。

松坂…ああ、古木君か。

江藤…近藤(貞次)さんか、古木さんです。わたしは一番末輩の状況です。

稲子…先生、法、経の場合は、旧名古屋経済専門学校土地・建物を名古屋市が引き取って、そのかわりに名古屋市が建物と土地をということでしたですね。そのつぎの教養部の建物の場合ですが、今までの方法というのはよくないということで、国の規制が厳しくなっていたと記憶しているのですが。それから、名城地区からの移転でも同じような問題が起きまして、その結果東山地区は文科系の学部でも、建物の規模、その他が非常に不均衡になってしまっています。教養部も随分不均衡なのですが、その間の経過というのが現在名古屋大学に残っている記録からはどうもはっきりしないのですが。なぜ、名古屋経済専門学校のあとを名古屋市に渡した時に、名古屋市の金で法・経の建物が建ったのか。なぜ、同じ方式が教養部移転の時に効かなかったというか、使えなかったのですか。それと同じ問題が文学部移転問題でも起きてきました。

松坂…経済学部の移転の時は建物交換かなにかでやったのでしょうか。ところが、名古屋経済専門学校の跡の地価というのはどんどん上がってきて、そして実際の結末をつける時になると、名古屋市が余程の金を出さない

ことには、大蔵省とか会計検査院のほうで承知しないという状態になってね。ところが、市は何千万円か以上金を出す場合には市会の議決を要すると言うのです。それではとてもたいへんだからというので、当時、市の庶務部長をしていた田辺さんが会計検査院に親しい友人を持っていて、よく交渉してくれてね、市会にかけない限度のいくらかの金は出したらしいけれども、それで結末をつけてくれたのです。名古屋市のほうも、それでたいへん面目が立ったらしいのです。

教養部の時の交渉の仕方は、僕は知らない。

稲子…山元さんはどうですか、なにか聞いておられないですか。

山元…わたくし、そのへんはよく存じませんが、ただ、名古屋経済専門学校と東山の土地交換ですが、従来そのようなことはできなかったのです。おそらく須川さんと文部省とで、東山と名古屋経済専門学校の土地の等価交換……。なにぶんわたくしも記憶が薄れていますけれどもね、文部省で特例法ができたのです。国有財産を等価交換してもいいというね、確かそういうような特例法をつくってくれたのです。時限立法だったかもしれませんけれどね。そして、須川さんがおやりになった名古屋経済専門学校との交換が最初だったと思うのです。わたしはその当時、滋賀大学にいたのですが、それを利用して附属小学校と学部とを交換したのです。附属小学校を大津市のほうに渡して、市から六万坪の土地を貰いましたね。それが今の滋賀大学の教育学部になっています。それも、今、お話しした特例法をつくってくれたからできたのですがね。おそらく、先生の今のお話は、交換のあとの評価がうまくいかないということなのじゃないでしょうか。

松坂…そうそう、評価の問題です。市にそんな迷惑をかけるわけにもいきませんしね。

井上…その特例法の活用ですが、名古屋大学の須川事務局長が全国的にも早い頃にやられたわけですか。

山元…最初だったと思います。

井上…最初だったのですか。

山元…しかし、これは記憶ですから、確かではありませんがね。文部省の施設部の計画課に聞けば、その特例法をつくった時期ははっきりすると思います。あるいは、本学の会計に行けば、会計例規集にまだ生きているかもしれません。そうすると、それを見れば年月がはっきりするかもしれません。

松坂…山元さんは会計課長をしている時にね、随分苦労をしているのですよ。代々木に田村さんの借りた家があって、そこへ一緒に行って、その当時はお米なんかも持っていかなければ泊めてくれないような頃で、随分苦労したものですよ。

山元…ちょっと今思い出しましたけれども、さっき先生がお話された法学部の図書は京都の古本屋と、それに京都大学へ重複の図書の譲渡を頼みに行ったわけですが、文学部は中村栄幸先生と当時の図書館の大島武四郎さんの二人で東京の古本屋をあさりに行きましたよ。

松坂…勝沼先生は、医学部の先生だから、実験などができれば、図書なんかはそんなになくてもいいという考え方をしていたんです。ところが、実際は法文系は図書がなければだめだということで、図書費を募集されまして、名古屋市から一〇〇万円貰いました。法学部の図書に名古屋市寄贈というのがあるでしょう。

江藤…その図書費の募集というのは、名古屋市とか愛知県とか卒業生とかを対象にですか。

松坂…だろうと思いますが、よくは知りません。ただ名古屋市から一〇〇万円貰ったことは確かです。それを全部法学部で貰ったか、あるいは経済学部の方へと分けたかは知りませんがね。

稲子…先生、元の事務局の建物というのは、文学部、教育学部移転当時計画して、ここに移ってきたわけなので

すが、この本部の最初の建物は、どういう金でひねり出したのですか。

松坂…どういふ金でって、六聯隊のものでひねり出したんだよ。

稲子…形はたいへんスマートですが、面積はたいへん小さいのですが。

松坂…それは、あれよりしようがないのだよ、あれよりできなかったのだもの。それも、竹中(工務店)が犠牲になったと言ったら変かもしれないが、講堂をつくったから、あれと同じようなものをつくりましょうと言って、つくってくれたのです。

食堂のほうは、何かの金が残っていたんですよ。

稲子…それから、記録を調べたのですが、先生の時代に「タコ足大学」の状態が減ってきた時、当然問題になるのが、学部、教養部の建物が整備されてくるにもなって、学内の厚生施設がどうなるのかという問題です。学生会館をどうするのか、食堂をどうするのかといった。食堂については、当時の記録を見ておきますと、東山地区の大きな食堂としては学生会館の中につくる、教養部の建物を一部使う、第三に経済学部の下を使うという問題がありました。結局これは経済学部が反対したために実現しなかったのですが。それから、さきほど先生が言われました学生寮の問題、こういう厚生施設の整備というのは当時どのように考えてみえたのですか。

松坂…おそらく、そこまでは手が回らなかった。学部を集中するだけで、手がいっぱいだったからね。僕は、西の端の、今教育学部附属高等学校などがあるところに、学生会館をつくりたいと思っていました。今は図書館ができたからいいんですけど、実際、当時の東山のキャンパスというのはまとまりのないものでしたから、そういうものをつくって、まとまりをつけられたらと思ってました。学生寮については、桜鳴寮の移転

の問題ですね、僕はそれ以外には考えませんでした。その当時というのは、文部省はひとつも金をくれないのですからね。文部省の金でできたのは理学部だけじゃないですか。工学部は高蔵の工廠でしょう。文部省の金でできたものというのは、ほとんどないのじゃないですか。何かあるかね。ああ、いわゆる大通りのところに、今の工学部の前のグリーンベルトの中に、ちょこんと一つ建物があったな。どうしてか知らないが建物があった、それを文部省はなかなか金くれなくてね、そんなみっともないことがあるかと、電話をかけて交渉したことがあるね。あれくらいだな。

稲子…グリーンベルトの中に、一つ木造の建物がありましたね。あれは、何でしたっけ。

山元…工学部の実験室か研究室でしたかな。

松坂…あれだけじゃないかな、あそこには恩田(格三郎)君がいたかなあ。

江藤…ただ、昭和三八年、われわれが移ってきた頃にはもうなかったですね。

稲子…法学部が移ってきた頃はまだあったですね。

江藤…そうでしょ、だから、昭和三七―三八年頃壊したということですね。

松坂…それと、僕の印象に残ってるのは、プラズマ研究所ですね。こんなことを言うといけないけれども、理学部というのは鼻息が強かったのだな。工学部に原子力の講座を設置しようとしていたのですが、(理学部では)工学部に何ができるものかという考え方をしている、なかなか工学部ではつくれなかったのです。これじゃあ、困ったものだ、なんとか協力してやることができるようにならなければと思ったのですよ。プラズマ研究所、これが、もしできれば、非常に刺激になると思ったのですよ。ただ、伏見(康治)君が言うには、これは大学の中につくるが、大学のいろいろの制約を受けたくないと言うのですよ。評議員も出さないと

です。そういうものを認めていいのかどうか随分迷いましたね。だけど、これはきつと、理学部とか工学部との共同研究のなにかになるのではないかと思ってね、承諾しましたよ。あれは、僕は非常によかったなと思いますよ。まあ、大学の中にいて、学生の運動の時に何も関係しないというのですからね。ああいうことができれば、非常に先生方の研究にはいいでしょうけどね。

稲子…あの、伏見さんの話では、プラズマ研究所を名古屋大学につくる時に、全国共同利用研究所があるけれども、従来の大学の中にどう組み入れるかという時に、先例は東京大学のある研究所が古い大学の規則によればということ、共同利用研究所であるにもかかわらず、東京大学の中に組み入れられてしまったという先例があるので。それでプラズマ研究所をつくる時には、そのことにたいへん苦労したということです。その時に「相互不干渉」という言葉が生まれまして、名古屋大学はこの問題に対して、たいへん理解があったために、現在もプラズマ研究所が全国共同利用研究所として非常によく運営されておるといことです。伏見さんなんかは名古屋大学だからできたのじゃないかという解釈なんです。

松坂…従来の考え方から言えば、勝手な話ですよ。

江藤…今もプラズマ研究所の所長は評議会に出ていないのです。

松坂…そのほかに、僕が総長に就任した最初の頃に、大きな問題としては豊川の空電研究所の移転の問題があったね、あれには困りましたね。

稲子…明電舎の問題ですか。

松坂…ええ、明電舎の問題です。金原(淳)君が所長をしていてね、ああいうのが来ると研究できないと、言うのです。豊川の土地というのは、金原君が進駐軍となにか関係を持ったりして、うまく手に入れたというので



す。ところが、地元ではあそこを工場施設にすると、経済的利益があるものですからね、非常にやっばりい  
ろんな圧迫をかけてきましたよ。だけど、僕は研究できないというのでは承知できないからと、言ったので  
す。そういえば、ある人がいいかげんにしないかなんて、僕に言っていましたね。ところが、明電舎の重宗社  
長というのは、僕の中学の友人の兄貴かなにかでね。それで、困ったな、困ったなと言っているうちに、沼  
津のほうに安い土地が見つかってね、そちらのほうに行ってくれて、ほっとしたんですが。名古屋大学のほ  
うでは、それについての委員会を、篠原君なども入ってつくったんですよ。そんな事がありましたね。

それとこれは全般的な問題だけど、伊勢湾台風ですね。わりあい、大学の中では被害が少なかったように  
思いますが。

稲子…大学の建物の被害は一八個というような数字が出ていまして、当時木造というのがかなり残っていました  
から。

松坂…それから、僕の際に不審火が出て、豊川分校が焼けました。結局(原因は)わからなかったですね。だから、  
譴責処分も受けなかったですね。

稲子…農学部も火を出しているのじゃなかったですか。

松坂…農学部のことは、移転の問題をいろいろ話しましてね。ただ、農学部の場合は農場がないといけないので、  
その問題がありました、困っていたところを、東郷が愛知用水の研究に使われていたのが、いらなくなった  
というので、元農林省におられた教授で、何っていったかな、その方が交渉してくれて、うまく貰えたので  
す。それで、農学部の東山移転ができたのです。あれは、非常に困ったのですよ。先生方はだいたい名古屋  
市に住んでいるのですが、安城に行くと、手当がつかないものですから、月給が減ってしまうのです。

山元…勤務地手当というのですね。

江藤…それでは、最後の項目に移りますか。

稲子…最後に、先生の総長ご在任中に、六〇年安保の問題がありましたして、名古屋大学の学生も安保反対運動にいろいろ参加しまして、デモをしましたところ、愛知県警から学内搜索を認めるのか、認めないのかという、かなり議論がありました。結果的にいえば、県警が搜索しなかったので、この問題が消えてしまったということがあったのですが。

松坂…どうも、その問題は記憶ないなあ。

稲子…評議会の記録には、どうするか、認めるか、認めないにもかかわらず、入ってきた時はどうするかというような、かなり細かい議論をしております。ところが消えてしまったというのは、県警があきらめたのです。まあ、事件そのものが大した事件じゃないのですが。

その間に大学管理問題がにわかにはクロースアップしてきまして、国立大学協会がこの問題を討議しておるわけです。一九六〇年(昭和三五)からはじまりまして、六二年九月には「大学の管理運営に関する中間報告(案)」というのが出されておまして、名古屋大学でも各部局でこの問題を検討し、大学としての意見をまとめて、国立大学協会に提出しておるわけです。非常に急ぎましたのは、中央教育審議会がこの問題にタッチし出した頃から、国立大学協会として緊急に意見をまとめたのです。結論的にはこの問題も特別の結論なく消えていくわけです。

松坂…僕は、その学内のほうは記憶がないな。文部省の関係で委員になんて、田中二郎君なんかとやった覚えはあるのだけでもね。名古屋大学の中でそのようなことをまとめた記憶はないな。

稲子…記録としては残っております。先生のおっしゃるように、文部省にも大学管理運営改善協議会というものが設立されました、先生も委員として参加されておられるのですけれども。

松坂…名古屋大学の報告書というようなものがあるの。

稲子…いえ、今、それに気がつきまして、急拠探すことになっておるのですが。結局、この時の問題というのは結論が出ない間に消えてしまったということなんです。国立大学協会の中間報告も(案)という形でとどまっております。

松坂…文部省のほうでは随分議論したのですがね。学内についてはね……。

稲子…それは、記録的には文部省のほうに残っているわけでしょうね。

松坂…それは文部省にあるはずですね。名古屋大学ですか……。

稲子…江藤さんはその頃はもう名古屋大学に来ておられたでしょ。

江藤…ええ、来てました。

稲子…それじゃ、やはり、検討したことには検討したのでしょう。

江藤…そう思いますね。学内では特に職員組合とかで、いろいろ研究集会などをやった覚えがありますね。おそらく、教授会としても検討していたと思いますけどね。

松坂…それで、法学部の教授会でもやったって。覚えがないがねえ。

稲子…記録によりますと、評議会の起草委員が有山(兼孝)さんですね。法学部から横越(英一)さん、三宅(正雄)さんという助教が参加して、起草委員会をつくって、何なにをまとめたという記録が残っておるのですが、肝心の中間報告の案をまだ介しておりませんので、照合できないのです。たとえば、名古屋大学としての意

見は、国立大学の管理運営に問題があるけれども、と書いてあるのですけれども、名古屋大学へはきわめて少数の大学において管理運営に問題があるというように書き直せというように意見を出しています。一般論としては迷惑であるというような記録が残っています。

松坂…僕の頃は、学内にそんなに委員会ばかりじゃなかったよ。話を聞くと、今は、何でもかんでも委員会ばかりで、そんなことをやっていたら、研究の暇があるのかなあと思うくらいだね。

稲子…ちよっと、最後にいいでしょうか。ふつう総長、学長というのは、学者としての現役を終えた人が管理の最高になりました、大学の管理運営の全体を指導するのですが、松坂先生の場合は、著作活動、研究活動が続けておられました、『民法提要』全五巻を完成されたのですけれども、たいへんな激職にもかかわらず、どうして本来の研究者としての時間体制を確保できたのかということ……。

松坂…だって、大学というのは研究が主なんでね、ことに僕ら旧帝国大学で育ってる者には学生を教えるというより、研究が主体だったのでね。学者の中でも行政の好きな人もいますがね。でもね、ばかばかしいですよ。まあ、中で選ばれた以上はこれはまあね。それからしようがないから、大学の制度の勉強でもしようと思つて、書いたのが「D.H.」の書物です。それから、大学に一〇時前には行かないことにしたのです。それまでは勉強してて、そして、あそこへ行ったら、しようがないですからね。人が来たら、いやだと言うわけにもいきませんからね。学問というのが、（総長としての）いやなこと逃げ場ですよ。まあ、僕は碁も打てないし、酒も飲めないし、そういう生活ですから、その外に僕は能がなかったのですよ。まあ、ほんと言つてね、学長なんてくだらない仕事ですよ。ことに社会的な地位にたつてね。ところが、この頃は大学の学長ということ、いろんなことに利用されるようになってしまっているね。

山口…今度の機会に、先生が総長をなさっている時の入学式および卒業式の訓辞というのを、読ませていただきました。今読ませていただいても、たいへんお力を入られたのではないかと思うのですが。

松坂…ええ、あれはもう苦勞でした。それは長い時間をかけないとね。それで、ああいうものの勉強もしましたしね。ああ、あれはいやだったな。

山口…当時は全然記憶になかったのですが、今度読ませていただいたら、すごく故事来歴とか、文献をたくさんお使いになっておられるので……

山口…あの当時、新聞に全部載ったのですか。

松坂…ええ、全部掲載されました。それから抜粋して載る場合は、新聞記者の能力というのがよくわかるのですよ。僕は、学長としてはあれには力を入れるべきだと思うのですよ。学生に接する機会というのはほかにないので。入学式、卒業式くらいにしかね。まあ、しかし、苦勞でしたね。

ところで、さっき話が出たように、名古屋大学は事務局の人数が少ないので、やはり、ほかの大学と違って、非常に苦勞されたと思います。須川君というのがやかましい人でして、随分皆さんが辛抱してやってくださったと思いますよ。

岩見…しかし、いい人でしたね。

松坂…うん、いい人だったね。自分が、あれだけできるものだからね。

江藤…須川さんの『半生を顧みる』、あれは非常に貴重ですね、たいへん参考になりますね。

岩見…あれは、個人のもですが、事実が曲げられているということは一件もないのですね。

江藤…ああ、あの記録ではですね。

松坂…対外的には勝沼先生が、中のことは須川君がすべて切り盛りしてやっていたと、僕は思うね。

江藤…さて、お伺いしておりますと、きりがないのでありますが、予定の時間がおおよそつきました。井上さん専任室員として何か最後にありますか。

井上…いいえ、結構です。

江藤…まだまだお伺いしたいことは、それぞれ皆さんあるかと思いますが、お疲れだと思えますし、予定の二時間もちょうど経ちましたので、このへんにいたします。きょうはお忙しいところを、わざわざお越しいただきまして、まことにありがとうございます。お礼申しあげます。

きょう、いろいろお伺いした非常に貴重なお話を、大学史編集のために、ぜひ生かさせていただきたいと思っております。

どうもありがとうございます。

文責 井上知則(名古屋大学史編集室員)

井口千世(編集室事務担当)